カビが生えちゃった！
るんびにー保育園（愛知県岡崎市）　【5 歳児】

　園庭の梅を発見して収穫を楽しみ、梅の実に触れたり匂ったりした後でへそを取ったり拭いたりして、梅ジュースや梅干を作った。梅干を作ってしばらくして見てみると表面にカビが生えていることが分かり、驚くだけでなく「どうして？」と疑問をもった。

子　：「あ！この白いのはなあに？」「ふわふわしているよ」「飛んで行きそう」
子　：「あ！これって、きっとカビだよ、僕見たことあるよ」
子　：「カビって色が付いているんだ」「緑や黒のもあるよ」
子　：「梅の色が違うよ。緑から赤くなっているよ」
子　：「みかんに生えたとき見たもん」
子　：「お汁に浸かってないところにカビが生えているよ」
子　：「このお汁は透き通ってきれいだね」「梅が柔らかそう」
保育者：「そうだね。中の方のお汁に浸かっている所にはカビがないね」
子　：「どうしてカビが生えたんだろう？」「暑いからできたのかな？」
子　：「お汁に浸かってなかったからカビが生えたんだよ」
保育者：「そうだね。汁に浸かっている梅はカビが生えていないね」
子　：「どんなカビか調べてみよう」「あっ、そうだ、虫メガネで調べてみよう」
子　：「どこ、見せて、すげーいっぱいだ」「白い毛でいっぱいだ」
子　：「イチゴにカビが生えているの見たことあるよ」「梅とよく似ているね」
「白くてフワフワしていたよ」「いいにおいがしたから、カビも食べに来たんだね」

　園児の祖母に相談したことで、“水のあがり”という状況や重石を知り、再度漬け直した。（その後食べた。）

●畑のゴーヤが実る

　みんなで種を蒔いたゴーヤが芽を出し、花が咲き念願の実が生る。本で見た通り、緑色でデコボコであることに気付き「本と一緒だね」と嬉しそうに話す。ゴーヤの花がキュウリと同じ黄色だったという話から、味の話となり、ゴーヤが嫌いな子と好きな子と意見が分かれる。好きな子は、「食べられる緑のところよりも白い種のところが苦いから、それを取り除けば大丈夫だ」と言うが、嫌いな子は半信半疑であった。大事に育てたため、苦手な子も一口は食べて欲しいと思っていたところ“ゴーヤは熟すと種が甘くなり、食べられる”という情報を入手し、取り組んでみることにした。

　段々と緑色のゴーヤがオレンジ色になり、変化していく。腐ってしまったと思い、中身を開いてみることにする。白いはずの種が赤い種に、青臭かった匂いが甘い香りへと変化していた。本当に味が変化したのかを確かめる為、赤い種を食べてみると、砂糖ほどではないが、ほんのり甘くなっていた。「小豆の味だよ」「スイカじゃない？」「メロンだよ」と様々な意見が出る。ゴーヤが苦手だった子も、他児の美味しそうに食べる姿を見て、手を伸ばしていた。「本当だ！ゴーヤって苦いと思っていたけど、甘くなるんだね。すごいね」と、ゴーヤに対してのイメージが変わり「私も食べられるよ！」と満足そうな表情を見ることができた。

子　：「あれ？！このゴーヤ元気がないねぇ」「なんかお婆さんみたいにシワシワだよ」
子　：「先生、大変！ゴーヤにカビが生えてるよ！！！」
保育者：「えー？！カビ？？」
子　：「ほんとだ、カビだね」「黒いのと白いのがあるね」「梅干の時と一緒だ」
【カビが生えた部分だけを取り除き、観察器で観察する】
子　：「わぁーカビが一杯だぁ」「黒いだけかと思ったら、緑色もあるぞ」
「え？見せて見せて！！」「フワフワしてるみたいだよ」
保育者：「カビって、色んな色があるんだね」
子　：「そうだよ、だって本に書いてあったよね」

甘くて美味しい〜！
ゴーヤって甘くなるんだね

事例.「ゴーヤにもカビが生えるんだね！！！」

　梅干作りで、カビが生えたことをきっかけに“カビの本”に興味をもった。「ゴーヤのカビは、本に書いてあるカビのどれなのだろう？」と子どもたちで調べ始めた。「これは黒だから違う」と、それぞれ観察器で交代に観察しながら、本を読み意見を出し合っていた。肉眼で見たカビは、黒と白であったが、観察器で詳しく見ると、その中に緑色のカビがあることを発見し「凄いね！いろんなカビが一緒にいるよ」「一緒に住んでるのかなぁ」とカビの世界を想像しながらイメージを膨らませ、追及し、実物と本に書いてあることが一致し、満足感を味わった。

　また、子ども達が、普段よく口にする「味噌汁」を題材に、連想ゲームをしてみる。すると「大豆」という言葉から、昨年の年長さんが育てていた枝豆が大豆へと変化した話が出て、納豆や豆腐も大豆から作られ、食べられるカビだと知る。

みどころ

　梅干に生えたカビに興味をもち、再度漬け直した梅にはカビが生えなかった経験を通して、カビへの知識をもったことは、「どうして？」「不思議」という思いとなり、ゴーヤでさらにカビを観察するという活動に結びつきました。梅を収穫し、食べるために意欲的に作業に取り組んだことは「ちゃんとやったのに、どうしてかな？」と疑問や不思議に思うきっかけとなり、その後の展開にもつながる大切な体験になっています。

Copyright 2003-2008 Sony Foundation for Education.